

令和8年度 学力向上のための重点プラン【中学校】 新宿区立西早稲田中学校

■ 学校の共通目標

【HP公開用・様式1・令和8年5月19日】

授業作り	重点	<ul style="list-style-type: none"> ・学習のねらいを明確にし、ICT機器を活用して、個に応じた授業を行う。 ・考え、対話する授業改善を推進し、思考力・判断力・表現力を高める。
環境作り		<ul style="list-style-type: none"> ・教室整備（掲示物や机の配置など）を入念に行い、落ち着いて学べる環境を整える。 ・学習時の決まりを明確にし、生徒に明示することで、集中して取り組ませる。

■ 各教科の取組について

教科	学習状況の分析 (各種調査から)	学校が取り組む目標 (日常の授業の様子などから)	目標達成のための取組
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・新宿区学力定着度調査の結果から、全学年において、A～D層の分布では、問題形式においては、応用・短答式・記述式の差が大きい。また、内容では、書くことに関することの差が最も大きく、次いで読むことに関することの差が大きい。 ・言語事項(漢字、文法)については、全学年において、全国や区内の平均を上回っているが、読むことの応用的な問題においては数値が低く、苦手が見える。 ・国語に対する意識調査においては、「家庭学習」への意識は昨年度に比べて改善が見られたが、「言葉の推敲」や「論理の構成」などについてはA～D層で差が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の解答形式への課題に対しては、国語の学習活動において、記号や一問一答ではなく、思考・判断・表現を伴う形式での解答や、文章や発話での表現を多く取り入れていくことで、苦手を克服させていく。また、学習内容における苦手が見られた書くことや読むことに関しての指導は、教材そのものではなく、書き方・読み方の指導を行ったうえで、別の教材においてその技術を使えるように実践的な活動を行っていく。 ・家庭学習の充実を継続して行いつつも、苦手意識の強い生徒に対しては、個に応じた指導を、短文の添削・ノート提出・創作活動などを通して、きめ細かく行っていく。 	<ol style="list-style-type: none"> ①定期考査や、各評価活動内で、記述式の問題を増やすとともに、生徒の応用力や実践力を問うものを年間を通して生徒に取り組みせ、その結果を授業内に還元していくサイクルを強化する。 ②長期休業の期間を活用し、定期考査等で苦手の見えた活動を生徒それぞれに振り返らせ、デジタルドリルを含めた個に応じた教材に取り組みさせる。 ③定期的に学習課題の提出をさせる。また、創作活動を授業に取り入れ、それを生徒間で共有することで、日常的に自身の使う言葉への意識を高められるようにする。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・新宿区学力定着度調査の平均正答率における区との差は、第1学年+4.0%、第2学年+5.0%であった。学力層は、第1学年はA層が42.4%でもっとも割合が高く、次いでB層が21.6%であった。D層は18.4%であった。第3学年はA層が39.3%でもっとも割合が高く、次いでB層が34.2%であった。D層は12.0%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数指導の中で、習熟度にあわせた問題演習(基礎的な計算問題や、思考力を要する応用問題)に取り組むなど、学習に取り組む意欲の向上を図る。 ・既習事項の積み重ねが特に大事な教科のため、つまずきの原因を的確に見取り、個別指導の充実を図っていく。 ・少人数指導の充実を図るなかで、反復学習の機会を増やすなど、特にD層の生徒の知識の定着を図る。 	<ol style="list-style-type: none"> ①タブレット端末を活用した反復学習の機会を増加(デジタルドリルや、表計算ソフトを活用した教材など)させる。 ②習熟度別指導クラス再編成の機会を増やし、実態に即した指導を行う。再編成するにあたり、小テストなどをこまめに実施することにより、複数の資料を用いる。

理 科	<ul style="list-style-type: none"> ・新宿区学力定着度調査の結果では、区平均よりも正答率が高く、どの学年も基礎的・基本的な既習事項がある程度定着していることが分かる。 ・新宿区学力定着度調査の結果では、応用問題・記述問題の正答率も高く、科学的に思考を要する問題にも取り組み、解答する力がついていることが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎的・基本的な既習事項の定着に向けて、一度学習した内容を振り返りながら、反復学習を行い、定着を図る。 ・授業内で、つまずきの原因を的確に見取り、個別指導の充実を図っていく。 ・授業全体を通じて上位層から下位層まで興味・関心をひくような発問をし、活気ある授業展開を行いながら、学習意欲を高めていく。 	<ol style="list-style-type: none"> ①プリントを活用した反復学習を行う。 ②実験プリントにおいて記述式によるレポートの作成と個別指導を行う。 ③ワークシートによる問題演習を行う。
社 会	<ul style="list-style-type: none"> ・新宿区学力定着度調査の平均正答率における区平均との差は、第1学年で+1.5ポイント、第2学年で+1.0ポイントという結果で既習事項であっても、時間が経つにつれて正答率が低い傾向が見られた。 ・グループ討議などを積極的に行った第1学年は思考・判断・表現が、小テストなどを定期的に取り入れた第2学年は、知識・理解の観点がよかった傾向が見られた。 ・地理に比べると歴史の理解や知識の定着に曖昧さがある。人名や年号など漢字や年号などに苦手意識が働いているのではないかと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習後から時間が経過しても既習事項を覚えていることができるように、単元の中盤、終盤における学習の場面でも、確認を織り交ぜた学習（反復学習）に取り組むことで、反復した学習や知識を身に付ける機会を設ける。 ・何をポイントとして（キーワードとして）説明をすれば良いのかに重点的に取り組んできた結果、自分の考えを記述することへの抵抗を減らすことができていることから、今後も継続する。 ・それぞれの学年の成果を踏まえて、小テストの実施やグループ討議など、積極的に取り入れていく。 ・歴史的事象について、身近な史跡や出来事と絡めて興味・関心や探求する意欲を育むとともに、確かな知識につながるように主体的に学習に取り組む意識と姿勢を身に付けさせる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①小テストの実施 ②デジタルドリルの活用 ③記述式による自分の考えをまとめる練習 ④授業内の発問による知識・理解の用語の適宜確認 ⑤ワークシートの工夫（歴史的事柄の整理がより一層行えるようにする） ⑥グループでの相談・討議を通じた表現力を高める工夫
英 語	<ul style="list-style-type: none"> ・新宿区学力定着度調査の結果から、平均正答率で全国平均と比較すると第2学年と第3学年ともに上回っている。 ・第2学年、第3学年ともに基礎ではA層とD層の差が45%以下となっているが、発展ではどちらの学年も66%となっており、A層とD層の差がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の基礎力の向上を図るとともに、応用力を引き出せるような活動などを取り入れる。 ・オールイングリッシュの授業を継続して実施していくとともに、英語を使った活動をさせることで実践力を身に付けさせる。 ・ALTと関わる機会を増やし、生徒が意欲的に英語でコミュニケーションを取ろうとする態度を育成する。 ・タブレット端末にあるデジタル教科書を使用し、生徒が家庭学習でも効果的に学習できるような課題を与える。 ・教科書や副教材などで文法指導を行うと同時に、既習の文法を会話などの活動で使用させ定着を図る。 	<ol style="list-style-type: none"> ①帯活動等での既習の文法を用いた活動による文法の定着 ②ALTとの活動による、聞く力と話す力の向上 ③タブレット端末を活用した学習時間の確保 ④デジタル教科書の効果的な活用 ④定期的な小テスト実施による、単語・文法の定着 ⑤授業内で取り扱った内容、小テストの課題、デジタル教科書の内容についての家庭学習の推進